**Vocational　Service：その本質を探る**

**（2013.8.22　卓話）**

**１．宗教改革からピューリタンの活動へ**

　免罪符の発行など中世末期の乱れたキリスト教に敢然と立ち上がったのがマルチン・ルターで、1524年に神聖ローマ帝国皇帝に宗教改革を求める「抗議書Protestantio（ラ）」を送ったことから、この一派はプロテスタントProtestantと呼ばれるようになりました。

ルター以後のプロテスタントで最大の勢力を持ったのがスイスで活動を開始したジャン・カルヴァンで、宗教と政治、教会と国家を区分し、禁欲的生活、職業を神の召命と見なして励むことなどを説いて支持を拡げました。

当時の英国では、ヘンリー８世がカルヴァン派新教を採用した英国国教を定め、その後メアリー１世がカトリック（旧教）を復活、跡を継いだエリザベス１世が旧教と新教を融合して英国国教とするなど、混乱が続いていました。英国国教会で改革を唱えていたカルヴァン派は、軽蔑的な意味でピューリタンPuritanと呼ばれていましたが、後には自分たちからピューリタンと称するようになりました。

　ピューリタンの多くは英国国教会から離脱して外部で活動するようになり、後にイングランド、スコットランド、アイルランドで宗教・支配・社会改革を求めたピューリタン（清教徒）革命（1641~49年）を起こすことになります。

一方、国教会の内部に留まって改革を進めた人たちへの王室・カトリックからの迫害が激しく、彼らは1606年にオランダへ集団で脱出した後、英国のアメリカへの入植者募集を知って、アメリカ移住を決意することになりました。

**２．メイフラワー号とアメリカ移住**

　1620年9月、ピューリタンとその支持者102名を乗せたメイフラワー号が、英国西南部のプリマスからニューヨーク付近のヴァージニア入植地をめざして出航しました。船の修理などで出航が遅れたため､66日間の命がけの航海の後、嵐を避て到着したのが、アメリカ東海岸の北、マサチチューセッツ州の海岸に釣り針のように飛び出たケープコッドでした。到着した11月末は、既に冬の厳しい季節になっていたため、彼らはケ－プコッド湾内の船中で冬季を生き延び､1621年３月末になってようやく対岸に上陸しました。

　当時のアメリカには英国のほか、フランス、オランダ、スペインなどが少人数の入植地をつくっていましたが、入植とは聞こえがよいものの、実態は流刑地だったのです。従って、ここでの入植生活は厳しく、翌1622年春まで生き延びたのは50名だったと記録されています。

**メイフラワー号**：　全長27.5ｍ、180t のエンジンのないボロボロの葡萄酒運搬用帆船で、その荷物室に移住者を乗せていました。移住者とともに降り立った犬がいて、これがアメリカで繁殖したのがアメリカン・コッカースパニエルだと言われ、また、ネズミ対策の猫が入植地に降りて、アメリカン・ショートヘアになったとも言われています。

**メイフラワー誓約**：　船内で団結、規律、新天地での開拓を協議し、協力・公正・平等を重んじ、法に基づく理想社会を建設するために、神の立ち会いのもとに作成された連判状で、アメリカ建国精神の元になりました。

**ピルグリム・ファーザーズ Pilgrim Fathers**〔巡礼始祖〕：　アメリカ合衆国の信教の自由の象徴として、メイフラワー号でやってきた非英国国教徒（ピューリタン）を指しています。

―――ピューリタンのアメリカ移住を支えたスポンサーの代表格にサー・ロバート・リッチ伯（ピューリタン）がいました。彼は第２回移住（1623年）､第３回移住（1628年）を成功させた後､1629年には６隻の船団で350人の入植者と大量の食糧、機材、武器を輸送、翌1930年には700名を乗せた大船団を出発させました。

1630年代の終わりまでに、２千隻の船が２万人以上の英国人をニューイングランドへ運んだのでした。

**３．フロンティア精神とピューリタニズム**

アメリカおよびアメリカ人を知るには、フロンティア精神（西にある理想郷を目指す）と、ピューリタニズム（神との契約に基づく使命感）とを知る必要がある、といわれます。アメリカは、東海岸北部のニューイングランドから西部開拓と、諸州併合を経て発展していきました。

ニューイングランド（メイン州、ニューハンプシャー州、バーモント州、マサチューセッツ州、ロードアイランド州、コネチカット州）はボストンを中心に、ピューリタニズムの拠点であり、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、アメリカで最も権威ある医学雑誌の一つNew England Journal of Medicine、日本美術の収集で知られるボストン美術館、小澤征爾が長く音楽監督を務めたボストン交響楽団など、アメリカの宗教、学問、文化の中心地です。ボストンにはまた、オールドノース協会（マサチューセッツ植民地時代の歴史を語る協会と、第35代大統領ジョン・F・ケネディ博物館があります。

　ここでピューリタニズムについて簡単に知っておきましょう。

**神**　　　　 　　**神**

　ミサ・儀式　　　 **聖書**

　マリア信仰　　　　　　　　　 聖書中心

**ローマ教皇**

　　　　　　　　　　 　　　 直接契約

**神父**　　　　　　　　 →使命感

　　　 洗礼　 告解

　　　　　 信徒　　 **教会**　 信徒　　**牧師**

　　　〔カトリック〕　 〔ピューリタニズム〕

　カトリック（旧教）もピューリタニズム（新教）も神の存在、用いる聖書に違いはありません。しかしカトリックでは、人の上に教会の聖職者（神父）が立ち、全世界の人の上に立つローマ教皇のみが神に向かう立場にあります。教会の行事としてミサ・儀式が多く、聖書には登場しないマリア信仰が存在します。一方、ピューリタニズムでは、人は神と直接契約で結ばれ、教会の牧師は信徒の代表者であって、基本的に信徒と同じ身分です。聖書中心主義で、聖書に書いていないことは信じないし、行わないため、マリア信仰はあり

ません。

**４．Vocation**

　ピューリタンは宗教的に神と直結しているので、日常生活そのものが質素倹約、神への使命感に溢れたものになっています。中でも、自分の職業を天職（神から与えられた仕事）と捉えるルターの思想と、カルヴァンの予定の教理（定められた運命）によって、貧困は神による永遠の滅びの予兆である反面、現世に於ける成功は神の加護の証であるとされたことから、ピューリタンは自分の運命が滅びの方向に定められているかも知れないという怖れから逃れるために、一心不乱に職業に打ち込んで、神に救われようとしました。

　この神から与えられた継続的な仕事、それ故に強い使命感をもって一途に邁進する仕事のことを**Vocation**と呼びます。

**Voc**- (vocal声楽)に見られるように「声」を意味する（-ationは接尾語）→「**神の声**」

　辞書には「天職」と訳されていることが多いようですが、これで**Vocation**の意味を理解できる人はいません。まして、**Occupation** （生活の糧を得るために働く職業）との違いを明確にしなかった日本のロータリー界では、意味不明用語です。

　Vocationはキリスト教の宗教用語ですが、カトリックにはその用語も概念も存在しません。これはピューリタンの用語・概念なのです。

　ピューリタニズムでは本質的に、収益を目的として仕事（職業）につくことを認めていませんし、蓄財する（金持ちになる）ことを目的とすることも認めていません。しかし、仕事に励んだ結果、収入が多くなり、さらに一層精進した結果として大きな財を成すことは容認しています。

　この微妙な違いを理解することが、Vocation理解の入り口になります。サービスの結果としてprofit（利益）をあげることは何ら悪いことではない、とシェルドンが何度も語り、

**He profits most who serves best.**

を提唱して、これがロータリーの標語となっていますが、Vocationを理解できない我が国のロータリーでは、profit（儲ける）を“報いられる”という言葉でごまかしています。

**５．アメリカの中のピューリタニズム**

**・**初代大統領ジョージ・ワシントンは紛れもないピューリタンで、彼が署名したアメリカの「独立宣言」はピューリタニズムの精神に溢れています。

**・**会社の方針を我が国では「理念、社訓、社是」

などと称していますが、アメリカでは「Mission（使命）、Value（価値）、Vision（展望）、Strategy（戦略）」という４項目で示し，“わが社は何のために存在するのか（使命）”が最重要課題です。

**・**第一次世界大戦中に定めた「禁酒法」は、前代未聞の法律ですが、これは当時の社会にみなぎっていたピューリタニズムの思想によるものです。

**・資本主義の発展**1904年、マックス・ヴェー

バーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を著し、オランダ・イギリス・アメリカなどのカルヴァニズム（ピューリタニズム）の影響が強い国で資本主義が発達したが、イタリア・スペインなどのカトリック国では資本主義が立ち後れた、と述べました。

一心不乱に職業活動に精進した結果、財を成したピューリタンが、その財を他人に分かち与えたのかというと、それは教義に反することでした。彼らは、周りの多くの人たちが安定した収入を得られるように、仕事をする“場”を与えたのでした。ここに「会社」が設立され、利益を分配する人（資本家）とそれを受け取る人（労働者）とが生まれ、資本主義が成立したのです。

アメリカでは当初、ピューリタニズムへの対抗勢力（カトリック）が弱かったために、世界の資本主義の中心へと発展したと解釈されています。

**・**ポール・ハリスは３歳の時、父の店の倒産で生誕地のウイスコンシン州ラシーン（ミシガン湖西岸）から祖父母のいるバーモント州ウォーリングフォードへ移り、ここで10代の終わり迄を過ごしました（バーモント陸軍士官学校、バーモント大学）。ポールの祖父はピューリタンで、バーモント州はピューリタニズムの中心地、ニューイングランドにあります。

**６．Vocational Service**

1927-8年、大英帝国・アイルランド内RI（RIGI）がロータリー活動を理解しやすくする目的で「目標設定計画」を提唱し、RIが「ロータリー活動の４路線（Rotary’s Four Avenues of Service\*）を受け入れました（\*本邦では四大奉仕と訳されています）。その第２路線が**Vocational Service**です。

　我が国では「職業奉仕」と訳されていますが、

これが混乱の元で、一般社会には通用しない言葉です。深川純一パストガバナー（第2680地区）はかつて、著述「職業奉仕の原理とその実践」の中で次のように述べられました。即ち、働いて生活のためにお金を稼ぐ「職業」と、働いてお金をもらわない「奉仕」という正反対の言葉を重ねたこの用語はどうにも理解が難しい言葉である、と。

「ロータリーの友」10月号（職業奉仕月間）に毎年掲載されていた全国ガバナーの「職業奉仕」論を拝見しても、誰一人として**Vocation**の本質に迫られた方がおられません。

**Vocation**はピューリタンの宗教用語ですから、これをOccupation（生活の糧を得るための職業）と同義語であると理解したのでは、どうにもなりません。宗教的背景を排除しているロータリーでは、（神との契約に基づいて）、（神から与えられた）という部分を除いても、なお「強い使命感をもって、誠心誠意働く職業」というニュアンスを残さなくではなりません。

　次に**、Service**を「奉仕」と訳したのでは意味をなしません。大英和辞典（研究社）に記されているように、Service＝活動（Activity）と訳すべきです。ﾃﾞｲﾋﾞｯﾄﾞ C ﾌｫﾜｰﾄﾞ書「奉仕の一世紀」の英文原著では、ロータリーのActivityをClub-,　Vocational-, Community-, International Service の４つに分別していて、その第２の活動路線(Avenue of Service)が**Vocational　Service**なのです（翻訳本のこの部分は文法的にデタラメです）。

　手続要覧の**Vocational　Service**の“章”では、「職業奉仕」という訳語だけでなく、長年にわたって原文の内容自体に混乱がありました。最近になってようやく、その活動（Service＝Activity）の中心課題が「職業教育」であると見られるようになってきましたので、　この“章”は「**強い使命感をもった職業活動**」であり、その中心が「職業教育」なのだと理解しなければなりません。